

「小浜島の織物について」

島嶼文化教育コース 2年
012945D
宮良 千亜紀

テーマ設定の理由

小浜島は織物の盛んな島で、自給自足の形で受け継がれて来た。衣生活における小浜島の衣の文化には、母から娘へ、孫へと伝えられ昔からの方法で染織の原点が残っている。特に印度藍によって染められ、織り上げられる布は美しく、印度藍の栽培と染織が小浜島の織物の中心である。このように小浜島の衣の文化には素晴らしいものがある。しかし、人造藍の普及により天然藍は印度藍も含めて衰退しつつある。また、若者のほとんどが島外に出て行き、織物を受け継ぐ人がいなくなっている。

こうした状況で子供達に、小浜島にとって織物はどのような存在であるかを考えてもらい、興味を持つ事で、小浜島以外の子供たちにも、自分の住む島の文化について考えるきっかけになればと思う。

1. どのような時に着用するのか

小浜島では行事の時(祭行事、法要)に着物を着用する。ほとんどが祭事のための衣で、祭事に合わせて織り始める。ほとんど祭りのためと言っているが、夏は涼しく、軽くて着心地の良い手織物は、普段時でも着用する。祭礼用の他には余った切れ端などを使い、普段着(シャツ、ズボンなど)を作ったりする。<写真1>それらは孫や娘にあげたりもする。切れ端を集めてつくっているから、継ぎはぎで上等ではないと言っているが、元は一つ一つ丁寧に織り上げた物であるから、品質は良く、しっかりとデザインされたもので、素晴らしいものである。昔はもちろん普段着として芭蕉布、麻布が織られていた。丈夫で洗濯にも耐え、夏は涼しいものである。



<写真1>

2.織物の糸や柄の種類について

糸は芭蕉、木綿、麻、ラミー（苧麻(チョマ)：イラクサ科の多年草）などを使用している。糸を自分達で作ることは少なくなって来たが、それでも一部には作っている人もいる。自宅の庭先や畑で栽培し時期が来ると、刈り取って繊維をほぐし、糸が作られる。木綿やラミーは買ってきたものを使用する。小浜島は印度藍による藍染めの盛んな島である。その他に福木（フクギ）等を使って染める。柄は縞、格子柄のほかに麻布には緋柄がある

* 1) 現在沖縄で使用されている藍は三種類である。

蓼（たで）藍、インド藍、琉球藍



インド藍



自宅の庭で栽培（インド藍）

3.礼服や結婚の時の格好

結婚の時の格好は、特にない。式場から借りてくることもあるし、家で織ったものを着ることもある。礼服は今でも織っており、葬式の時も木綿の白を着ていく。

4.祭行事ごとに着るものが違うか

はっきりと決まっているわけではない。豊年祭の場合は藍染めの黒地、結願祭も藍染めの黒地を着ていっても良い。また、踊りに合わせての衣装を着る。

- * 豊年祭・・・今年の収穫に感謝し来年の豊作を祈願する、稲・粟の収穫儀礼である。小浜島の豊年祭は神秘的で厳粛であり、島では最大の行事となっている。島外から集まってくる人も多い。豊年祭は旧暦の六月の「任」から三日間行われる。2) 祭りの日は、母や妻、姉妹が心を込めて織ってくれた紺の麻の着物や紺の芭蕉を着て、祭礼に参加する。

- * 結願祭・・・今年の豊年に感謝し、来年の五穀豊穰を祈願する。旧暦の8月・9月「土の亥」の日から3日間行われる。3) ミルク神の衣装も手織りで、頼まれた人は着物が約1週間、はかまは1週間で仕上げ提供したという。

5.年齢や性別によって晴れ着などの着るものに違いはあるのか

男性 若い世代・・・綾（稿：経、緯）の大きな派手もの。年配者になるほど綾は細くなる。

老人・・・紺無地・芭蕉生地（白地）。麻や芭蕉の布の着物。

男性はくんずん（藍染めの黒地の麻芭蕉織物）を着る。女性は芭蕉布の緋織り花織袴を着ることが多いが、くんずんを着ることもある。



くんずん



6.商品化されていない理由について

小浜島の織物は、まったくといっていいほど商品化されていない。商品化されない理由について、行事の度に自分のだけではなく、家族や孫の分まで織らなければならない。豊年祭、結願祭、お盆と行事が多いこともあり、売る分まで織って作る余裕がない。また、難儀をして、家族のため心を込めて織ったものには値段のつけようがないともいう。

小浜島で織られている物の横の長さは、大体が40cm以内の物が多く、商品にするためには40cm以上が必要であるが、小浜の人たちはわざわざ作るうとはしない。一部では組合に入っている人たちが、商品として織っていると聞くが極わずかである。

7.集落によって違いはあるのか。

小浜島には小浜と細崎の二つに分かれている。小浜島のほとんどの祭行事は小浜を中心として行われている。小浜の人は行事や何かあった場合は着物を着るが、細崎の人は着物を着る事はほとんどない。

8.小浜島の藍染めについて

小浜島の藍染めは、印度藍を用いる。印度藍の立て方は、およそ次の通りである。

1. インド藍の枝を刈り、葉の部分を水に浸し重石をのせる。
2. 青汁液に木灰を混入し攪拌します。

小浜島ではガジュマルの生木を焼いて作った木灰を使用する。

3. 上澄み液を捨てると、泥藍と呼ばれる沈殿物が取れる。



4. 糸（芭蕉や麻、綿など）を藍染めする。
5. 染めた糸を干す。

これで、藍染めの糸の完成である。

参考文献

- * 1) 富山 弘基、大野 力『沖縄の伝統染織』、徳山書店、S49、173～177
- * 2) 黒島 精耕『小浜島の歴史と文化』、2000、p89
- * 3) 黒島 精耕『小浜島の歴史と文化』、2000、p92

協力して頂いた方々

- * 仲盛 長儀さん
- * 花城 キミさん、英行さん
- * 大久 ミネさん
- * 上原 キミコさん
- * 安里 れいこさん

ご協力有難うございました。